

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350722

研究課題名(和文)「競争 協同」「体づくり運動」の学習場面における体育カリキュラムのポリティクス

研究課題名(英文)Curriculum politics of physical education focusing on the teaching and learning of "competition-cooperation" and "fitness"

研究代表者

井谷 恵子 (Itani, Keiko)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80291433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、カリキュラム・ポリティクスの視点から体育学習における「競争 協同」、及び「体づくり運動」がどのように解釈され、カリキュラム構成され、授業・学習として実践されるのか、さらに学習者がどのようにそれらを受け止め、内面化していくのかについて、事例的に検証した。

その結果、地方教育行政や学校体育においてスポーツの競争性や体力の序列化が強調される傾向がローカル・ポリティクスとして認められた。また、それらのポリティクスは、女性のスポーツ離れなど、たくましさや競争の世界に違和感や居心地の悪さを感じる人々をスポーツから離脱させ、周辺化させる働きを持つことが推察できた。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the politics of the Japanese physical education curriculum, this case study examined the ways in which "competition-cooperation" and "fitness" are interpreted, constituted as curriculum, and taught and learned. It also analyzed the ways in which learners receive and internalize such curriculum.

The result of this study demonstrates that there is a tendency to emphasize competition in sports and put physical strength into a hierarchy, within the local educational administration and school physical education. These curriculum politics could result in the marginalization of the students who feel uncomfortable in the space in which strength and competition are valued, including the underrepresentation of women in sports.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育カリキュラム 体力向上 序列化 ローカルポリティクス 競争原理 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

B. パーステインや S. ボールらによってイギリスを中心に発展してきたカリキュラム社会学は、社会における階級間格差の是正を目指した教育の試みが、結果的には社会的不平等の再生産に貢献していることを明らかにしてきた。これらの批判的カリキュラム研究は、フーコーの権力論をもとに、政治や経済、社会階層といった大きな見えやすい権力とともに、教育実践の場や日々の生活に張り巡らされた網の目のような権力の存在を提示している。教育の場に働く権力のダイナミクスも同様であり、政治や文化、伝統を始め、ジェンダーや民族など、多様なベクトルが複雑に織りなす権力関係としてとらえることができる。M. アップルら(1994)は、教育の場、特にカリキュラム策定に働く権力が誰の手において誰にどのような利益や被害をもたらしているのかを問い、「社会的(経済的、文化的、政治的)不平等の再生産の実態を社会的権力の不平等をテコにしながら解明」(長尾, 1995)しようとしてきた。

体育や健康教育に関わる分野では、J. エヴァンスや D. ペニー、J. ライトらによって研究が進められている。J. エヴァンス(2007)らは、法律で規制されるような「政策(Policy)」と、法律で規制されない「擬似の政策(pseudo policy)」という2種類のポリティクスを「大文字と小文字のポリティクス(P/politics)」と表現し、これらのポリティクスが教育の場に複合的に働く事例として、摂食障害をとりあげている。英国の学校で深刻化している若い女性のやせ願望や摂食障害を、肥満や生活習慣病を問題化し、これを管理しようとする「生権力」や競争、比較、説明責任など明示的な結果を求める「パフォーマンスティビティ」の概念から説明している。

本研究では、体育カリキュラムに働く多様で複合的なポリティクスのうち、授業場面に起こるリアルな権力関係に注目し、特に、体づくり運動と多くの運動領域に出現する「競争 協同」に着目する。その理由は以下のとおりである。

若者の体力低下への危惧や健康的で活動的な生活習慣の確立に向けて、現行の学習指導要領では小学校の1年生から高校3年生まで「体づくり運動」が必修となっている。体育における身体形成の目標は、歴史的に見ると軍事や高度経済成長を支える資質として、ポリティカルな利用がなされ、多くの体育嫌い・運動離れを生み出したという苦い教訓がある。現在の「体づくり運動」重視のカリキュラムも、単なる心身のたくましさへの志向や数値的な体力向上にのみに依拠する実践が拡がれば、過去の繰り返しとなる。また、健康づくりの強調は、医療・福祉の費用を削減するための健康的な国民づくりであり、行きすぎれば個人の生活や人体の国家管理システムに加担する危険性にも警告がみられる。「瘦身願望」や「摂食障害」も、メディ

アや社会が作り出す肥満への恐怖心や「完全な身体」への願望などを増幅する側面にも注意が必要である。

一方、スポーツは、「競争 協同」場面が表裏一体として含まれており、若者の学習教材として高く評価され、体育カリキュラムの中心的内容である。しかし、社会の競争的環境に適應できる人材育成という要請や教師の信念などから競争原理が過剰に機能する懸念もある。逆に、現行の学習指導要領で重視される社会性や道徳性、さらには東日本大震災以降、連呼されるようになった「絆」や「連帯」の強調によって、全体への服従や自己主張の抑制が暗黙のうちに強要され、内面化される危険性も認められる。

本研究に至る研究として、「体育におけるカリキュラム・ポリティクスへのアプローチ」(平成16-18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1), 研究代表者 井谷恵子)、及び「体育カリキュラムに影響を及ぼすローカルレベルのポリティクスに関する研究」(平成22-24年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1), 研究代表者 井谷恵子)がある。前者では、カリキュラムを支配するポリティクスは複雑で多様であり、学習者が経験する実際の体育カリキュラムを策定し実行する地方教育委員会や学校、教師集団、体育教師個人など、ローカルレベルでのカリキュラム・ポリティクスを検討する必要性が認められた。後者の研究では、一つの学校を事例にフィールド調査を行い、学校での年間計画の策定や指導方針に関する議論、教師の対応など体育カリキュラムが作成され、実行に至るダイナミクスを検討した。

2. 研究の目的

公的な教育カリキュラムは公正で平等に見えつつ、実際には「公的な知識」をつくり出し、社会的不平等の再生産や学びの偏在を起している。体育カリキュラムの策定と実行に関するポリティクスを理解するためには、カリキュラム策定の背後に働く政治や経済動向などの社会状況とともに、ローカルレベルの教師の考え方や授業の内実、学習者間の相互作用などリアルな学習の現場に着目する必要がある。

本研究では、体育学習の「競争 協同」、及び「体づくり運動」の学習場面に注目し、「競争 協同」、「体づくり運動」がどのように解釈され、カリキュラム構成され、授業学習として実践されるのか、さらに学習者がどのようにそれらを受け止め、内面化していくのかについて、フィールド調査によって事例的に検証することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「体づくり運動」については、「子どもの体力向上」に関する文部科学省、及び、東京都、大阪府により公表された行政文書を対象とし、それぞれの行政組織の教育政策の指

針，教育計画のほか，「子どもの体力向上」に関する答申，施策の指針，実施計画，予算書，及び各施策を具体的に示した資料について分析を行った。

(2) 「競争-協同」については，なわとび運動の新たな現象に注目し，その特性から分析を行った。

(3) 具体的な学習場面については，教師へのインタビュー調査と単元計画，授業プランなどの資料収集，および対象授業の観察によるフィールドノート作成と録音・録画から検討を行った。

4. 研究成果

次の4点から本研究の成果をまとめる。

(1) なわとび運動からみた「競争-協同」

スポーツを主たる内容とする体育では，競争-協同は表裏一体のものであり，だからこそ価値ある学びを保証すると考えられてきた。勝敗を通して自己認識・自己形成をし，技術を高め，チームワークを尊重していく点では体育科教育に好都合な教材であるというという認識に対して，競争-協同の質や内容，学習者への影響などを批判的に問う研究は僅少である。

表1. なわとび運動の特性

	カードを用いたなわとび	競技的な大なわとび	フリースタイルのなわとび
主なねらい	技能の向上 達成	技能の向上 達成	新しい技能への 挑戦，発見・創造
競争の質	弱い 個人での達成	強い ナンバーワン志向	弱い オンリーワン志向
協同の質	弱い 一方向	強い 単調	強い 多様
学習集団	主に個人	集団 等質志向	集団 多様性志向

近年の体育実践で強調される「競争-協同」について，なわとび運動に視点を当て検討した。なわとび運動は，子どもの遊びとしての歴史が長く，体育の教材やクラスづくりの素材としても幅広く用いられてきた。限られたスペースや冬期にも可能で，体づくり運動として多用されるだけでなく，運動会などの集団演技としても用いられる多機能性を持つ教材である。多くの学校では，なわとびカードを用いた個人達成型の教材として扱ってきたが，近年ではフリースタイルのなわとびとともに，大なわとびを用いて集団で回数を競うなわとびを学校教育に導入する傾向が見られた。日本レクリエーション協会によって公認種目として競技化されただけでなく，企業やメディアが関わった競技大会も開催されている。人数や時間など競技ルールは

明確で，ターナー，ジャンパーの役割が固定されるなど専門化が進んでいる。

表1は，3種類のなわとびについて，教育目標，競争の質，協同の質，学習集団の特性を記述したものである。カードを用いたなわとび学習では，個々の技能の習得と向上を目指し，競争の質は個人での達成を目指すためにそれほど強くはない。ただし，ランキングなどの競争原理を組み込んだ場合は排他的な競争も出現する。学習者個人での取り組みが中心であるため，協同は弱く，学習集団も形式的な場合が多いと考えられる。競技的な大なわとびでは，ルールに応じた成果を出すために一定の技能修得が不可欠となる。競技性が強まることは，ナンバーワンを目指す他集団との排他的な競争に導かれやすくなる。成果をあげるために集団のつながりは強くなるが，回数やスピード，同質性が強調され単調な協同になりやすい。フリースタイルのなわとびの場合は，新しい技への挑戦や発見・創造が主要なねらいとなり，オンリーワン，つまり個性を目指す弱い競争性となる。多様性を重視し集団で技や演技をつくり出すことによって強い協同性が求められる。

学校や指導者の方針，学習者の設定によって，これらの特性は変化する。教育上の価値を一側面から評価することは危険である。しかし，競技性を強め，ランキングや賞の授与など外発的な動機づけを強めた場合には，排他的な競争志向が強まり，自分達が勝利するなど，成功するためには相手が失敗しなければならないという構造に否応なく組み込まれる。

(2) 「子どもの体力向上」をめぐるローカル・ポリティクス

2002年に出された子どもの体力に関する中央審議会答申以降の「子どもの体力向上」をめぐる東京都，及び大阪府の取組に視点をあて，それらの地方教育行政の取組と「体力答申」との間に「ズレ」を生じさせているローカル・ポリティクスについて検討を行った。

主な成果は表2に示した。答申では，近年の社会環境や生活様式の変化が子どもの体力・運動能力低下に影響を及ぼし，改善には多面的な「総合的な方策」が必要であることが指摘されたにもかかわらず，体力調査結果の数量的な推移や他地域との比較に執着する現状であることがあきらかになった。今日の教育施策が強力に導入している評価システムによって数量的に説明のしやすい側面に評価が偏ることが原因の一つと推測できる。また，子どもの体力問題への具体的な事業は，学校に偏っていることが明らかになった。学校が担う取組にはほとんど予算が仕分けられないまま，学校が子どもの体力問題の責任を一手に引き受ける構図となっている。さらに，小中学生の運動習慣づくりに競技スポーツを活用する事業が多く見られた。一方，具体的な事業には，部活動における競技力向

上や小中学生の駅伝大会，オリンピック教育などが多く含まれており，子どもの体力向上を社会の課題とした背景には，スポーツ振興や競技力向上の狙いが潜んでいると推測できる。

表2. 「子どもの体力向上」をめぐるローカル・ポリティクス
競争原理と評価のズレ
競争的プログラムの多用
学校に責任が集中する構図
スポーツ振興の口実としての「体力向上」

(3) 学習場面のローカル・ポリティクス

近畿地方にある公立小学校の中学年2クラス，及び高学年2クラスの全児童と体育の授業担当教員4名を対象として，フィールド調査を実施した。

教員や単元によって大きな差異が見られた。競争を導入や動機付けに上手く使用する教員の場合は，授業が活性化し，学習者の意欲が高まっている状況が見られた。一方，競争の結果としての勝敗や序列にこだわる場合は，学習者の意欲がそがれたり，楽しさや協力関係など授業の雰囲気が悪くなる場面も多く見られた。

教師へのインタビュー調査からは，小学生という発達段階では競争の結果にこだわる傾向が強いため，この特性を理解した上でクラスづくり，授業づくりが必要であることが示唆された。また，クラス全体が活性化される競争のためには，仲間との協同や思いやりなどの重要性に気づかせる学習過程が不可欠であることが示された。

(4) 体育カリキュラムのジェンダー・ポリティクス

体育カリキュラムに埋め込まれたポリティクスを検討する基礎として，現行の学習指導要領に視点を当て検討した。

体育のカリキュラム・ポリティクスは，女性の運動・スポーツ離れにみられるように，運動・スポーツの世界で周辺化される人々を作り出す力学を持つことが示唆された。現行の体育カリキュラムでは，武道・ダンスの必修化，体づくり運動の強化，系統性の重視という変更点のどれもが，運動やスポーツ，身体価値を踏み足する作用を持っている。それらが，教師の態度や親の期待，社会全体の風潮と絡み合い，身体や運動・スポーツの特性を通して，ジェンダーの序列化を促進するポリティクスとして機能する。さらに，学校文化には男性をたくましく育てることへの期待が埋め込まれており，体育やスポーツ活動を通じて，女性を期待の外に追いやることになる。この結果，たくましさや競争の世界に違和感や居心地の悪さを感じる人々，多くは女性をスポーツから離脱させていると推察できる。

男女平等を達成したはずの体育カリキュ

ラムは，公的には男女平等の顔を持ち，両性に扉を開いているように見えつつ，男性中心の基準と女性の不可視化を潜在的に進行させている。

この他，体育カリキュラムの競技化に関わって，スポーツイベントのポリティクスに関わって研究を深めることができた。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催は，体育カリキュラムにも強く影響を及ぼすことが推測できる。すでに，オリンピック・パラリンピック教育の推進について文部科学省が中心となって推進している。この観点から，カナダの先進的な研究者である Helen Jefferson Lenskyj 氏の研究成果などから本研究を深めた。

<文献>

アップル，M.W.・ウィッティ，J.・長尾彰夫（1994）カリキュラム・ポリティクス 現代の教育改革とナショナル・カリキュラム．東信堂：東京．

エヴァンス，J ほか（2007）「体育における政策，パフォーマンスティビティ，説明責任」平成 16-18 年度科学研究費補助金基盤研究（C）(1)『体育におけるカリキュラム・ポリティクスへのアプローチ』（研究代表者 井谷恵子）報告書．

長尾彰夫（1995）カリキュラム研究方法批判 教科再編へのポリティカル・アプローチ．カリキュラム研究 4:43-53．

5. 主な研究論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 井谷恵子．学校体育に埋め込まれたジェンダー・ポリティクス．現代スポーツ評論．33 巻．73-80 頁．査読なし．2015．

(2) 井谷恵子．「子どもの体力向上」をめぐるローカル・ポリティクスの検討 東京都，及び大阪府の状況に注目して」体育学研究 60-2:429-448．DOI: 14090．査読あり．2015．

(3) 井谷恵子・近江望・池川佳志．近年の体育カリキュラムとジェンダー・ポリティクス：現行の学習指導要領と「なわとび運動」の変質に着目して．スポーツとジェンダー研究．Vol.13．pp.111-122．査読あり．2014．

(4) 井谷恵子．「子どもの体力向上」をめぐるローカル・ポリティクス．体育科教育．62 巻 11 号．pp.10-13．査読なし．2014．

(5) 井谷恵子．体育カリキュラムのポリティクスとジェンダー．季刊セクシュアリティ No.63．pp.40-47．査読なし．2013．

〔学会発表〕(計7件)

(1) 井谷恵子．オリンピック・パラリンピッ

ク教育の批判的検討： Lenskyj, H.J.によるオリンピック教育批判から．日本体育学会第 66 回大会．於：国土館大学（東京都世田谷区）2015.8.25．

- (2) 井谷恵子・井谷聡子．「スポーツ・メガイベントの植民地主義 ～フェミニスト、クイア、ポストコロナル理論の視点からスポーツ・メガイベントの政治を問う～」日本スポーツとジェンダー学会第 14 回大会会員企画シンポジウム．パネリスト：井谷聡子，内海和雄，関めぐみ．於：明治大学駿河台キャンパス（東京都千代田区）．2015.7.5．
- (3) 井谷恵子．女性のスポーツ離れと体育のカリキュラム・ポリティクス．2015 年女性学会大会シンポジウム「スポーツにおける男性性の解体」．於：京都市男女共同参画センター（京都府京都市）．2015.5.16．
- (4) 井谷恵子．学校体育における「子どもの体力向上」をめぐるローカル・ポリティクス：競争原理と成果主義の浸透．日本体育学会第 65 回大会．於：岩手大学（岩手県盛岡市）．2014.8.27．
- (5) 井谷恵子・近江望・池川佳志．体育カリキュラムのジェンダー・ポリティクスを考える．日本スポーツとジェンダー学会第 13 回大会．大会抄録集．pp.22-24．於：中京大学（愛知県豊田市）．2014.6.27．
- (6) 近江望・井谷恵子・池川佳志．競技化する運動遊びについての考察：大なわとびを事例に課題を探る．日本スポーツ教育学会第 33 回大会．於：日本大学文理学部（東京都世田谷区）．2013.10.20．
- (7) 井谷恵子．体育科教育におけるカリキュラム・ポリティクスとジェンダー．日本スポーツとジェンダー学会 12 回大会シンポジウム「身体活動がもたらすエンパワーメントの可能性」大会プログラム・抄録集．p.11．於：京都教育大学（京都府京都市）．2013.7.13．

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 井谷恵子．女性のスポーツ離れからみた体育のカリキュラム・ポリティクス．猪崎弥生ほか編『ダンスとジェンダー 多様性ある身体性』，一二三書房．全 309 頁．268-283.2015.

6．研究組織

(1)研究代表者

井谷 恵子 (ITANI, Keiko)

京都教育大学教育学部 教授

研究者番号：80291433

(2)研究協力者

近江望 (OMI, Nozomu)

京都教育大学非常勤講師

池川佳志 (IKEGAWA, Keiji)

大阪市立焼野小学校教諭